



24 危険な動植物について留意すべきポイントを教えてください。



1 危険な動植物についての留意点

(1) 想定される事故事例

へび、ハチ、毒虫による事故は生命を脅かす重大事故につながりますので、以下のことを認識してください。

子どもが「危険な動植物の危険性を知らないこと」が最大のリスクになります。過去の体験活動や学校行事において既に事故が発生しています。

指導に当たっては、先ずこれらのことを念頭に置いて考えていきましょう。

毒蛇、スズメバチでの重大事故は毎年発生しており、特にスズメバチ等では2010年だけでも20名の方が死亡しています。

対策としては、以下に挙げるような事故の傾向例を参考に、マニュアル作成のポイントとしてください。

【事故の傾向例】

- ・田植え体験の際に土手でマムシを踏んで噛まれた。
- ・稲刈り体験の際に、稲藁をつかんでマムシに噛まれた。
- ・ハイキングの際に突然ハチに刺された。昆虫と一緒に虫かご等にハチを入れた。民宿の庭先でハチに刺された。
- ・フルーツの収穫体験中に毒虫に刺された。
- ・就寝中にムカデに刺された。
- ・木の下で遊んでいて、樹液が降っているのに気づかず皮膚炎になった。
- ・里山散策でうるしにかぶれた。
- ・ハゼ並木でハゼかぶれをして痒くて眠れなかった。

(2) チェックポイント

- ①リスク予測のために体験活動場所を実地踏査し、リスクの洗い出しをしてください。
- ②受入れの3日前と3時間前に協議会関係者全員で実地踏査をして、安全確認をしてください。
- ③マムシ、ヤマカガシ、スズメバチの治療には血清が必要です。事前に血清を保有している病院を探し、担当医師に子どもの受入れ情報を伝え、万が一の場合の対応をお願いしておいてください。
- ④マムシとネズミ、マムシとイノシシ、水辺・あぜ道・湿地帯にマムシ、稲穂とイノシシ、新緑と毛虫、新緑と樹液かぶれ、冬眠前の熊出没、6月～11月

暑い時期にスズメバチ， 6 月～7 月， 9 月～11 月のムカデ， 椿・サザンカとチャドクガ…など， それぞれ関連性があります。地域の達人・名人ならではの危険動植物発見の秘訣がありますのでそれらの情報を入手して， 予防と対策を実施してください。

2 ハチ

ハチについては， 次の点に留意してください。

【「ハチ刺されに対する予防のチェックポイント」】

【事前準備の際のポイント】

- ・ 実地踏査の際に、ハチに刺されやすい場所か， 事前に情報を得ておくこと。
- ・ 黒い服を着ているとき、匂いが強いもの（香水、化粧品、整髪料など）を身に付けているときに刺されることが多いので， 服装と匂いに注意すること。
 - 長袖， 長ズボン， 帽子を着用すること。
 - 服の色は， 白や明るい色であること。
- ・ 虫さされの薬（副腎皮膚ホルモン含有の抗ヒスタミン軟膏）を携行すること。（アンモニアは効果なし）
- ・ 子どもや先生には， ハチの巣を見ても近付かないこと， ハチを攻撃しないこと， 山道から外れないこと， 下記「ハチに刺された場合の対処方法の主なポイント」を伝えておきましょう。
- ・ アドレナリン（エピネフリン）投与の可能な病院（ハチ毒への対応が出来る医師）を確認しておきましょう。

【当日の予防方法の主なポイント】

- ・ 子どもがハチの巣を見付けても近付かせないこと。
- ・ 子どもには， 飛んでいるハチを攻撃させないこと。
- ・ 子どもが， 山道から外れないように注意すること。

【ハチに刺された場合の対処方法のポイント】 ※専門家から指導を受けること

- ・ すぐにその場から逃げる（スズメバチが追いかけてくる距離は通常， 巣から10～50メートルといわれている）。その際， 頭を隠して（帽子無し→頭＝黒色）， 低い姿勢を取り， 暴れないで静かにその場を離れるのが良いといわれている。
- ・ 万が一刺されたら傷口を水でよく洗い流し， 手で毒液を絞り出す（口では吸わないこと）。
- ・ 虫さされの薬（副腎皮膚ホルモン含有の抗ヒスタミン軟膏）を塗る（アンモニアは効果なし）。
- ・ 同時並行して， 至急救急車を呼び， すぐに治療を受ける。

ハチとの接触による死亡者数は、2010年は20名（男性16名・女性4名）、2009年は13名（男性11名・女性2名）である（政府統計の人口動態調査・下巻：死亡のX23～スズメバチ・ジガバチ・ミツバチとの接触による死亡者数。他方、政府統計によれば、毒ヘビ・毒トカゲによる死亡者数は、2010年及び2009年ともに4名）。

3 ヘビ

毒のあるヘビと毒のないヘビを一般の農林漁家が区別することはできませんし、させるべきではありません。

子どもには、ヘビは種類を問わず捕まえないことを徹底してください。

【ヘビに対する予防のチェックポイント】

- ・ヘビは捕まえない。小さなヘビでも、弱ったヘビでも捕まえない。
- ・山道を外れない。
- ・穴の中などに手を入れない。ヘビが隠れていそうなところを刺激しない。
- ・家の裏庭などを含め、ヘビのいそうなところには近付かない。
※ヘビのいそうなところに近付かざるを得ないときは、予め確認しておく。
- ・足元やふくらはぎを守ることができる服装・装備をすること。

ヘビに咬まれたら、至急、救急車を呼んで病院に連れて行ってください。止血、毒抜き（ポイズンリムーバーの使用を含む）等は、ハチ毒への対処と同様に専門家から指導を受ける研修会を開催してください。

なお、毒虫の刺されや毒ヘビに噛まれた場合には、患者を安静にさせてください（動くと体内に毒が回る）。

4 危険な海洋生物

海にも危険な海洋生物がいます（ハブクラゲなどの刺胞動物、オコゼ類などの魚類、ウニ類などの棘皮動物）。^{（注1）}

海で活動する場合は、活動場所の危険性のチェック項目に、必ず危険な海洋生物の調査も入れてください。

○公の施設である海浜公園内において、海水浴客が水深 50 センチメートルの所で、海洋生物で毒針を持つアカエイに右手親指を刺され、直ちに病院で治療を受けたが、エイの毒性が強く、右長母指伸筋腱断裂等の後遺症を負った事故につき、地方自治体の過失が否定された事案（東京地裁平成 8.5.21）（判例タイムズ 920 号 170 頁）

○海水浴場でダイビングの指導をしていた男性が波打ち際から 5 メートル沖の浅瀬に裸足で入り、客に指導中にオコゼに刺され死亡したと報道されている事故^{（注2）}

5 毒キノコ

毒キノコによる食中毒事故が、毎年発生しています。厚生労働省ウェブサイト「毒キノコによる食中毒に注意しましょう」では、「食用のキノコと確実に判断できないキノコは、絶対に採らない！食べない！売らない！人にあげない！」と書かれ、「食用と間違えやすい毒キノコの例」を写真を掲載して説明していますので参照してください。

6 有害植物

有害植物については、「身近にある有害植物」（東京都福祉保険局・H20年3月）が写真付きでわかりやすく紹介していますので必ずチェックしてください。
同書には次の事例等が紹介されています。

- ・ ヤマイモと間違えてグロリオサの球根を食べて食中毒により死亡した事例。
- ・ 自宅敷地内でスイセンとニラを間違えて採取し、炒め物と味噌汁にして食べたところ食後30分頃からおう吐、下痢等の症状を呈した事例。
- ・ シキミの実を松の実と間違え食べたところ、吐き気、おう吐に次いでけいれん、めまいなどの症状を呈した事例。
- ・ 家庭で観賞用に栽培していたカロライナジャスミンの花をジャスミンと間違え、花に湯を注ぎお茶にして飲用したところ、足がふらつく、目の焦点が合わない等の症状を呈した事例。
- ・ ヨウシュヤマゴボウを「山ごぼう」と誤認して味噌漬けにして食べたところ、吐き気、おう吐の症状を呈した事例など。

7 そのほか

そのほか、地域ごとに危険な動植物は異なります。たとえば、キツネが出没する地域ではキツネの腸に寄生している寄生虫によるエキノコックス症のリスクがあり、キツネに近付くと感染の危険が高まることが指摘されています^(注3)。

(注1) 沖縄県衛生環境研究所「気を付けよう！！ 海のキケン生物」参照

(注2) 2010年8月5日付け YOMIURI ONLINE

(注3) 北海道ウェブサイト「エキノコックス症の知識と予防」、生物科学部衛生動物科長高橋健一「キツネとエキノコックス」（ウェブサイト「北国生活・それぞれの科学」）

[目次に戻る](#)



25 農作業中の道具による事故を防ぐためにどのような点に留意すべきでしょうか。



1 農作業中の道具による事故

(1) 指導上の留意事項

宿泊体験活動をする上で子どもに使用させる道具，子どもが物作りをする上で使用する道具については，特に指導上の注意が必要です。

① はじめて手にする道具

農家の方々や指導者の方々が日頃手にしている道具は，子どもにとっては初めて手にすることも多く，そのような子どもの視点に立って指導することが大切です。

② 使用する道具の制限

体験活動では，子どもに使用させる主な道具を，予め地域受入協議会で把握し，それ以外のケガをしやすい危険な道具を子どもに使用させることがないよう留意するとともに，学校の理解を得ておくことが望ましいといえます。

③ 指導の仕方

指導に当たっては，第4章第1節「子どもに対する指導の基本的な留意点」で述べたとおり，事前の注意だけではなく，行為の都度，子どもに注意を与えてください。また，使用方法を間違えると何故危険なのかを子どもに丁寧に指導・説明してください。

(2) 管理上の留意事項

道具は，事前と事後の管理も大切です。使用前の点検・手入れ，置き場所の管理にも注意してください。

2 事故・トラブルのケース

農業体験活動中の事故についてはまだ裁判例は出ていませんが，農家さん自身の自損事故は多数発生しています。農林水産省の「こうして起こった農作業事故～農作業事故の対面調査から～（事故事例集）」をご参照いただき，皆様の体験活動に参考になる事故事例を把握していただきたいと思います。同事例集には，剪定ばさみでの事故，耕耘機での事故，草刈り機での事故などが多数掲載されていますが，事故の要因として，「時間がなく慌てていた」「疲れていた」「靴のサイ

ズが合わなかった」「いつもの作業などで油断していた」などのヒューマンエラーも分析されています。

(http://www.maff.go.jp/j/seisan/sien/sizai/s_kikaika/anzen/23taimen.html)

【事案】

平成24年9月26日午後4時30分頃、ある地域の畑で、26日から2泊3日の予定で農家に泊まり農業体験等をするために修学旅行で訪れていた中学3年生の男子（当時15歳）が、わらを裁断する農業機械に右手を挟み、人差し指と中指を切断する事故が発生したとの報道がなされています。

（2012年9月27日読売新聞）

【コメント】

動力を用いる農業機械は、農家さん自身でも指や足を切断する事故が繰り返し起きていますので、子どもたちの農業体験活動では使用しないよう推奨します。

各協議会において、農業機械の扱いについては統一的な基準を設けて、安全管理に努めてください。

[目次に戻る](#)



26 海での活動の留意点を教えてください。



1 基本的な留意点

Q. 素足ではダメだと聞きましたが？

A. 砂に埋まっている割れたビンや、金属製のゴミや釣り針などを踏んでしまうケガが多く発生しています。体験活動中はサンダルや靴を履いておきましょう。

【ガラスの破片を踏んだ際の応急処置】

- ・ピンセットでガラスを引き抜きます。
- ・血液を絞り出します。
- ・消毒液で消毒します。
- ・ガーゼを当てて医療機関へ（破傷風の可能性もあります）。

Q. クラゲに刺されたらどうしたら良いですか？

A. 海水浴やシュノーケリング中に、毒クラゲの触手に触れると発症します。触手には、毒液と刺糸を含む刺胞という袋があり、肌に突き刺さり毒が侵入します。灼熱感を伴った激しい痛みが生じミミズ腫れになり、全身倦怠感、頭痛、吐き気、痙攣などの症状で死亡する場合があります。強い痛みなどが出たときは、すぐに皮膚科を受診してください。

【クラゲに刺された際の応急処置】

- ・患部は海水で洗い流します（真水は浸透圧で刺胞が破れてしまいます）。
- ・触手が残っていたらピンセットで取り除きます。
- ・アルコールかアンモニア水で患部を消毒します。
- ・症状が軽ければ抗ヒスタミン剤配合副腎皮質ホルモン軟膏を塗ります。
- ・毒は熱に弱いので、熱い砂をかけてから海水で洗い流すのも方法です。
- ・小さな穴をあけたペットボトルに海水を入れ水鉄砲のように洗い流します。

※「第4章 第5節 第4項 4 危険な海洋生物」を参照してください。

Q. 潮だまりでの危険は何ですか？

A. 磯場に付着するフジツボやカキで切ったギザギザの傷口は縫えずに消毒も大変です。サンダルは滑って危険ですので、かかとのあるサンダルか、濡れてもいい靴を履くこと、子どもの場合は学校の上履きや体育館履きなどが良いでしょう。

【潮だまりの安全準備品】

- ・ マリンブーツ（上履きが便利です）。
- ・ 帽子、薄手のTシャツ（熱中症、日焼け対策）。
- ・ 軍手（ふやけた手は切れやすくなります）。
- ・ 日焼け止め。

- ・ PFD (Personal Floating Device) (ライフジャケット)。
- ・ 主に切り傷用のファーストエイド・キット。
- ・ 十分な飲み物 (熱中症予防に必需品)。

【安全チェックポイント】

- ・ 干潮時間帯 (前後 3 時間程度)。
- ・ 潮位 (大潮や小潮などによって潮位が変わります)。
- ・ 子どもの背が立たないような深い潮溜まりはないか。
- ・ 危険生物がいる場合は、その写真やイラスト。

【海の事故を防止するために注意するポイント】

- ・ 睡眠不足や疲労しているときは泳がないようにしましょう。
- ・ 準備運動をしてから (こむら返りを予防)。
- ・ 一人では泳がずバディシステムを組みましょう。
- ・ ブイやいかだの下をくぐらないようにしましょう。
- ・ 離岸流や波の動きを事前に確認しておきましょう。
- ・ 海中生物を触らないようにしましょう。
- ・ 深呼吸を繰り返す (ハイパーベンチレーション) 潜水は禁止する。
- ・ 消波ブロックには近づかない。
- ・ 人数チェックは必ず行いましょう。
- ・ スイミングキャップを統一してひと目で区別できるようにします。
- ・ エリアを決めて監視スタッフを配置しておきましょう。
- ・ 熱中症の予防に水分補給をしましょう。
- ・ 場合によっては監視・救助用の小型船舶を用意しましょう。

Q. 離岸流^(注1) とは何ですか？

A. 波が打ち寄せるときには、岸から沖に向かって強い川のような海水の流れが発生します。この流れにつかまってしまうと、あっという間に沖に流されてしまいます。岸と平行に泳げば、抜け出すことができます。防波堤やテトラポットの隙間、海面がざわついて泡が集まっている場所が発生ポイントです。離岸流は幅 10～30m、長さは 200m といわれています。

また、岸の近くは横に流れる沿岸流が発生することもあります。横に流され知らない間にかかなり遠くまで流されることがあります。

ライフセーバーに聞くなどして、場所を変えるようにしましょう。

※珊瑚礁海域ではリーフカレントに注意してください。

(注1) 海上保安庁ウェブサイト「離岸流」, 「リーフカレント」についてを参照してください。

2 事故・トラブルのケース

遊泳禁止区域での事故が多発していますので、遊泳禁止区域では絶対に子どもを遊ばせないでください。その上で子どもをしっかり監視してください。

[目次に戻る](#)



27 川での活動の留意点を教えてください。



1 川での活動の留意点

水の中では人は息ができないため、突然深みにはまる、川の流れに引き込まれる、落水してパニック状態となるなど、数分間でも溺死してしまいます。安全な活動を実施するためには、PFD（Personal Floating Device：ライフジャケット等の総称）を適切に着用するなどして、危険に遭遇した場合でも水面から顔を出すための対策が必要になります。

川では、特に下記を考慮した安全対策を考えるようにしましょう。

①水温

川の水温は上流域が一番低く、下るにつれて温度が上がってきます。季節や場所により、夏季であっても山地の渓流域のような低水温である場合があります。水中では陸上にいるときよりも急速に体温を奪われ、体温が低下すると低体温症となります。唇が紫色になり歯が鳴るほど体が震えたら、既に低体温症に陥っている証拠です。

季節や水温、活動内容を考慮しながら、ウェットスーツなどその活動に適した服装を準備して、体温を奪われないようにする工夫が必要です。また、乾いたタオルや着替え等も準備しておくことも大切です。

②川の流れ

地形や流れの影響で、川の水面や水中では様々な流れが発生しています。PFDをつけている人でさえ川底へ引き込まれたり、同じところでぐるぐると循環してしまい脱出することができなくなる流れもあります。また、水中にある岩や倒木などにひっかかってしまい、流れの水圧で脱出できないところもあります。

③増水

川の場合には上流で局地的な集中豪雨が発生すると、自分たちが活動をしている場所では、雨が降っていないなくても急に増水することがあります。常に上流側の水位や当日の天候を把握しておくこと、また、水が冷たく感じるようになる、急に水が濁ってきた、ペットボトルや流木などの漂流ゴミが急に増えるなど、増水前の予兆を見逃さないように注意しましょう。ダムの放水による急激な増水にも注意してください。

2 川のリスク

①堰堤

堰堤とは、洪水時の流れを弱め、取水するために水を溜める人工構造物です。堰堤は渇水時には穏やかで、その上流側はプールのようなになるため、一見、遊び場として適しているように見えます。しかし、一旦増水すると堰堤を乗り越えて下った流れが堰堤下では強力な循環流となり、そこに落ちたものはその循環流にはまってしまい、脱出することができなくなってしまいます。

②中州

中州とは、川の中央付近に上流から流れてきた土砂などが堆積してできた陸地となっている地形のことです。中州は増水すると浸水する可能性があり、そうになってしまうと身動きできず退路を断たれてしまいます。

③川底の形状

流水の中を歩いていると、足が川底の岩の隙間に挟まれて抜けなくなり、上半身が下流側に倒れこんでしまう場合や、横渡った倒木などに体が引っかかり上半身・下半身ともに下流側に倒れ込んでしまう場合など、水流が強いために脱出できない状態になります。比較的穏やかな流れの中でも、小さな子どもは流れにより体が下流側に押し付けられて脱出できず少しの水深でも溺死にいたることも考えられます。

他にも川には危険個所がいくつも考えられますので、活動の計画時には川の特徴をしっかりと把握しておく必要があります。

【川の事故を予防するためのチェックポイント】

下記にチェックポイントの例を挙げていますが、これらがすべてではありませんので、地域特性や活動内容等に応じて項目を洗い出してください。

(1)参加者

- ・水泳の能力を含む身体能力を確認しましょう。
- ・健康状態を確認しておきましょう。
- ・活動に応じた服装・靴等、持ち物を用意しましょう。
- ・準備運動をしっかりとしてから入りましょう。

(2)プログラム

- ・天候や河川の状況を確認しておきましょう。
- ・ダムの放水予定など地域情報を収集しておきましょう。
- ・同じフィールドを使用する団体・個人との調整をしておきましょう。
- ・使用機材・装備の安全を確認しておきましょう。
- ・特にライフジャケットを着用する場合は、サイズ違いに注意しましょう。

(3) 指導者

- ・参加者数や状態にあった指導者を配置しましょう。
- ・指導者間で監視の役割分担を定めましょう。
- ・川のレスキューができる指導者を確保しましょう。
- ・河川特有の危険個所を関係者全員が熟知しておきましょう。
- ・事故発生時の連絡体制、通信機器などの準備をしておきましょう。
- ・避難経路を関係者全員で共有しておきましょう。

3 その他

川だけではなく、池・沼・用水路などに子どもが転落して溺れるケースが少なくないので、子どもが近付いて落ちないように細心の注意をもって監視してください。

特に、次の点に留意してください。

- ・田植えなどで田んぼの近くの用水路が増水している時期は、いくら水深が浅くても、流れが速く、溺れる危険があります。^(注1)
- ・川・池・沼・用水路等の近くでは、ボールを使った遊び（キャッチボール等）は止めさせてください。ボールを池などに落とし、取りに行くと、溺れて死亡する事故が多いためです。^(注2)

(注1) 用水路（水深約40センチ）で小学3年生が溺れて意識不明の重体となり、翌日死亡したとの事故が報道されている（2010年7月29日付けYOMIURI ONLINE）。

(注2) 平成24年3月10日、池で5歳と7歳の兄弟が転落し、長男が死亡したとの事故が報道されている（報道時点で弟は意識不明の重体）。ビーチボールで遊んでいたところ、ボールが池に入ったため、長男が取りに行こうとして足を滑らせて転落し、兄を心配して池に近付いた弟も転落したという（2012年3月10日付けYOMIURI ONLINE）

[目次に戻る](#)



28 山での活動の留意点を教えてください。



1 山での活動の留意点

山や森では樹木で見通しがきかないため、いつの間にか森の奥深く入り込んでしまい、すぐ先が崖で切れ落ちていることに気がつかないことがあります。また、下草や落葉で足元の穴や突起が隠れて、ぬかるみや濡れた樹木・コケなどは滑りやすく、これらが原因で転倒・転落してしまう場合があります。

活動前には必ず下見をしながら活動する範囲を地図上で確認して危険個所をチェックしておくこと、また、迷わないために活動中も現在地をこまめに確認する必要があります。

山や森で活動する場合に留意すべき点は大きく下記の4つに分類できますので、それぞれの分類に応じて対応策を考えておきましょう。

- ①地形によるもの（転落、落石、落枝など）
- ②動植物によるもの（スズメバチ、熊、毒ヘビ、ウルシ、マダニなど）
- ③天候によるもの（大雨、落雷、強風など）
- ④人為的なもの（道具・火の扱いなど）

2 山のリスク

①道迷い

道に迷ってしまうと気持ちに余裕がなくなり、わからないまま歩きまわり現在地が把握できなくなり、状態を悪化させてしまいます。参加者には道に迷った場合の対応方法を事前にしっかりと伝えておくことが必要です。協議会・指導者は道に迷うことがないように対策を講じておくとともに、事故が起きた場合の捜索方法なども決めておくことが必要です。

②滑落

樹木や下草などで足元の地形が隠れているところで、踏み外して滑落してしまう場合があります。危険な場所では全員に注意を促したり、ロープなどで注意喚起する、場合によってはコースを変更するなどの対応を考えます。特に子どもは大人の予想しない行動をとる場合がありますので、登山やハイキング中には指導者は必ず先頭と最後尾を歩く、危険個所に大人を配置するなどの配慮が必要になってきます。

③落石、落枝

雨の後は地盤がゆるんでしまうため注意が必要です。特に雨天後のハイキングや登山コースについては、指導者だけで判断させることは避け、必ず協議会と安全を確認した上で実施するように徹底しましょう。道中で人為的な落石が発生する場所がある場合には、事前に注意を促すとともに、落石させないための対策や落石した場合の退避方法などを講じておくことが必要です。

④その他

前記以外にも、落雷、強風、雪崩、火山ガスによる中毒などが考えられます。活動の計画時には、活動場所の地形や地域特性などをしっかりと把握しておくことが大切です。

【山の事故を予防するためのチェックポイント】

下記にチェックポイントの例を挙げていますが、これらがすべてではありませんので、地域特性や活動内容等に応じて項目を洗い出してください。

(1)参加者

- ・参加者の年齢にあった無理のないコースを設定しましょう。
- ・健康状態を確認しておきましょう。
- ・天候の悪化に耐えられる服装や雨具等を用意しましょう。

(2)プログラム

- ・途中で天候が悪化した場合の安全な行程を用意しておきましょう。
- ・プログラムを中止する場合の代替プログラムを用意しておきましょう。
- ・危険箇所や迷いやすい場所に対する危険防止策を立てましょう。
- ・危険な動植物の痕跡を調べ、その対策を立てておきましょう。
- ・水分補給、トイレの場所などを確認しておきましょう。
- ・装備の安全・不足がないかを確認しておきましょう。

(3)指導者

- ・参加者の人数に応じて適正な指導者の人数をそろえましょう。
- ・指導者間で監視の役割分担を定めましょう。
- ・山岳気象、危険な動植物、救急法などの基礎的な知識を身につけましょう。
- ・気象状況を常に把握できる体制を整えておきましょう。
- ・事故発生時の連絡体制、通信機器などの準備をしておきましょう。

※装備は、最少限でも携帯電話、地図・コンパスといった基本的なものを持参し、使い方も習得しておきましょう。

※天候判断は、厳しく考え、時には活動を中止する勇気を持つことも必要です。

【リスクマネジメントの考え方】

事件事例を紹介すると、「子どもを川で遊ばせるのを止めさせたほうがよいでしょうか」との質問をいただくことがあります。

しかし、紹介している死亡事故の判例は、いずれも「危険な箇所がある場所」で活動をしているにもかかわらず、「指導者が危険箇所を確認していない」とか「指導者が危険箇所を確認したが、監視をできていなかった」などのケースです。

つまり、大きく2つの絞り込みがなされており、どこでも当てはまる考え方ではありません。

大切なポイントは、①「どのような場所で」、②「どのような状況になると」事故が起きるかを検討することが重要です。

①「どのような場所で」は、本書で紹介している海・川・山などの危険箇所のことです。

②「どのような状況になる」とは、本書で紹介している指導法のことです。いわば「①危険な深みがある川で、②指導者が見ていないと事故が起きる危険性が高い」ということです。

したがって、今まで事故なく行ってきた活動を一齐に止める必要はありません。

大人が複数人で役割分担して監視していなくてもいい川はたくさんあります。

どんな川でもリスクばかりを強調して監視を強化する必要はなく、バランスの取れた活動を実践できるように学んでいるのであり、活動のリスクを発見して活動を止めるために安全管理を学んでいるわけではありません。

リスクは、イタリア語のリスカーレが語源で“勇気をもって試みる”という意味です。

リスクのない活動は、ない。あらゆる活動にはリスクが伴います。しかし、それはリスクがあるから止めようということではありません。

あらゆる活動にリスクが必然的に付いている以上、そのリスクを正しく知り、事故を予防して、活動の目的を達成しようというのがリスクマネジメントの考え方です。